

---

# ポケモンと暮らす日々

紅東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモンと暮らす日々

### 【Nコード】

N8316Y

### 【作者名】

紅東

### 【あらすじ】

ポケモンと暮らす成人女性の穏やかな日々。何気ない日常の短編集です。

## 春とイーブイ

日当たりの良いソファに小さな茶色のポケモンが寝そべっていた。だらりと手足を投げ出して、安心しきった様子でぴいぴいと寝息をたてている。

畳んだ洗濯物を片手に、人間は起こさないようにそつと移動する。しかしうさぎのように長い耳はぴくりと震え、うつすらと焦げ茶の瞳がのぞいた。くありと大口を開けてあくびを一つ。

片付けを終わらせた人間がイーブイに手を伸ばすと、寝ぼけ眼のまま頭を手にすり寄せた。甘えるイーブイを膝に抱き上げて、人間はソファへ腰を降ろす。膝をころころと転がり前足で腕を掴む姿に、人間の頬が思わずゆるんだ。

このイーブイはペットでもコンテスト向けでもなく、バトルのために育成されている。レベルも技も性格も心意気も申し分ないが、強気故に甘える姿は珍しかった。

掴まれた右手をそのままに、左手で背を撫でる。イーブイはうつとり瞳を閉じた。

細く開けた窓からは暖かな日差しと、揺れる木々のさざめきと鳥たちのさえずりが入ってくる。いつしか喉の鳴る音は穏やかな寝息に変わり、撫でる手は静かに止まり、やがて人間の首が緩やかに倒れた。

後はもう麗らかな微睡みが残るだけだった。

## 夏とシャワーズとグレイシア

二枚重ねの遮光カーテンの更に奥、壁と扉に遮られた風呂場は青系の涼やかな色で溢れていた。

換気口からは涼しい風が吹き、半分ほど水で満たされた浴槽にシャワーズとグレイシアが遊ぶ。水の張られた金盥には果物と凍ったペットボトルが浮かび、よく冷やされている。

水色の水着をまとい、空色の簡易椅子に腰掛けた人間の手には、クリアブルーの小さな水鉄砲があった。

水の中でじゃれあう二匹は、はしゃいで冷気を吐き出し合う。威力の削がれた冷気は互いに極薄い霜を張るが一瞬のことだ。

不意に二匹はその冷気を人間へ吹きかけた。霜が降るほどではなかったが、それは真冬の風よりも冷たい。

人間は少しだけ身震いしてから、やったなーと笑って水鉄砲を発射した。

シャワーズが喜んでぴゅうと水を吹き返す。グレイシアが弱い吹雪を降らせ、壁の一部に霜が張る。余波で壁に張られた青い星がこちらと凍り、粘着力を失って落ちた。

水の掛け合いの間に冷気が吹く。二匹と一人は冷えた飲み物で喉を潤しながら、飽きることなく遊んだ。

りいんりいんと涼やかな虫の音が聞こえる。狭い浴室とはいえ、涼しい場所で存分にはしゃいだ二匹は、腹がくちくになると一足先に寝室へ行き、設置された冷却シートの上で眠りについた。リビングのクーラーはすでに切っており、開いた窓からぬるい空気が部屋へ入り込んでいる。食事の後片付けを済ませた人間は浴室へ向かった。浴室の壁は小さな水色の星が剥がれかけ、大きな透明のハートが床に引っ付き、一枚しかない氷色のジュゴンは湯船に沈んでいる。その湯船は少しばかり濁り、すっかりぬるくなつた金盥には細かな

果物の破片が浮かび、辛うじて網の袋で纏められたごみはびしょび  
しよで、そのままでは捨てられない。

それを見やって欠伸ひとつ、人間は楽しい鼻歌だけをお供に片付け  
をはじめた。

## 紅葉とデンリュウ

夜風に巻き上げられ、紅葉が2階のベランダに届く。人間がそれを捕まえようと手を伸ばし、デンリュウも真似をしたが、のらりくりとかわされて、ベランダに敷かれた簀の子へと落ちた。

なにがおかしいのかけらけら笑う合間に、人間は銀と硝子で美しく細工されたグラスを煽る。グラスが揺れるたび、湛えられたプラチナゴールドに細かな沫が生じてゆらゆら昇る。

デンリュウはグラスを見つめて小首を傾げる。すると尾に灯る光りが瞬いた。それを見た人間は意味もなく笑った。明滅する灯りに、色付いた木々が浮かび上がる。その秋の絶景を眺めている人間は、にこにこ上機嫌な笑顔を浮かべていた。

びゅうと風が吹き上がり、色とりどりの葉がベランダへ舞い上がってきた。今度こそ葉を捕まえようと人間はグラスを置き、デンリュウはぴんと尾を立てた。

あっちへひらり、こっちへひらり。後一步のところで葉は手を逃れてしまう。あーあ捕まえられなかった、と笑いながらデンリュウと顔を見合わせた人間は、あーと大声で叫びながらデンリュウを指差した。

小首を傾げた拍子にデンリュウの視界へ赤い葉が舞い落ちてきた。風もないのにどこから来たのか。さらに首を傾げたデンリュウに、人間はにこにこ笑って言った。額の紅玉んとこに乗ってたんだよ。デンリュウが紅葉と同じ色だから仲間だと思ったのかなあ。

なんだかファンシーなことを口にした人間は、唐突にデンリュウに抱き付いて、イタツと飛び上がった。左手首にアースを付けているくせに、すっかり帯電を失念していたようだ。

それさえも酔っ払った人間には面白かったらしく、けらけらと笑いながらデンリュウに抱き付く。そして、秋はいいな、デンリュウの季節だ、綺麗だし楽しいと酒臭い息で意味の解らない事を言った。

デンリュウの尾の紅玉が明滅する。その度に人間は笑って、デンリュウは夜更けまで明滅を繰り返した。

## 空っ風とウィンディ

びよおおうびよおおう。泣き叫ぶような空っ風に、びりびりと窓が震える。

遠雷のように空高く鳴いて地上を乱暴にかき回す季節風は、冬の間中ほぼずっと山から吹き下ろしている。

がちやりと扉が開く音と強風が窓をビリビリ震わせたのは同時で、それに続いたおおーうという呻きは、がちやりと閉じた扉に遮られ遠ざかった。

ウィンディが首だけ回すと、玄関の扉に白い布の端がはさまっている。この家の主人が帰ってきたのだが、どうにもタイミングが悪かったらしい。扉を開いたと同時に一際強い風が吹き、なすすべもなく閉じられてコートを挟まれてしまったのだ。この季節には良くある事だった。

風が収まるのを待つて扉が開かれる。うひーさむいさむいー、と首をちぢこめて、今度こそ人間が帰宅した。

ウィンディは身じろぎ、丸まった体制から手足を伸ばす。ついでにあくびと伸びをする。人間はカウンターキッチンの向こう、冷蔵庫へ食品を収めてからリビングへ来た。その道すがらにある箆へマイバックを放り、後は一直線。耳と頬を寒さに赤くしてコートを着たまま、ただいまーとウィンディの腹に抱き付き、わしわしと背や腹を撫でる。あつたかーと腹に顔をうずめた人間の顔を、ウィンディは目を細めて舐めあげた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8316y/>

---

ポケモンと暮らす日々

2011年11月24日20時53分発行